

6月7日（日）主日礼拝レジュメ

「見放されたと思える時にも」 詩篇 71 篇 10～13 節

10 節に「私の敵は 私のことを相談し 私のいのちを狙う者がともに企みます。」とあるので、敵と呼ぶ存在がいたのかもしれない。しかも「命を狙う者」とあるので、命の危険にまでさらされていた。人生には悩みや問題がつきものだろう。例えば、9 節「私の力が衰え果てても」とあるが、年齢による力の衰え、病気がちになるなど。人間関係や後に残していく家族のことなど、いろいろと悩みが尽きない。

10 節を見ますと、この人のいのちを狙う機会をずっと待っていた。11 節では「神は彼を見捨てたのだ。」と言っている。神に見捨てられた、神に見放されたと詩篇の作者本人が自覚的に思い、また周りで見ていた敵たちも、神は彼を見捨てたと思う何かがあったのかもしれない。私たちも神に見放されたのではとか見捨てられたというような感じを持つことがあるだろうか。一つ目は、主との交わりが希薄になった時。二つ目が、罪を犯して悔い改めていない時。三つめが孤独を深める時、四つ目が、物事がうまく進んでいかない時。

神は、みこころのままに私たちを導かれる。そして、私たちの身に仮に自分の意に反する、予期しないわざわざいと思えるようなことが起こったとしても、それは決して神があなたを見放したとか見捨てたという証拠とはならない。

ここで敵たちは、この人の信仰を攻撃し、信仰を揺さぶろうとしている。私たちに対しても、サタンが、私たちの敵としてさまざまな機会に信仰を揺さぶろう、信仰から離れさせよう、神からあなたは見放されている、見捨てられていると思わせようと狙っていることを忘れたくない。神はご自分の真

実にかけて、神ご自身の側から私たちを見捨てるとか、離れるということは決してないことをおぼえたい。

13節のことは、別にのろいの祈りではない。敵と思える者に対して自分で何か対応策を考えるのではなく、また具体的に何か行動するのでもなく、すべてを神にゆだねるという信仰の現れ。神がふさわしい報いを自分の敵と思える者に与えてくださると信じている。なぜなら、神はすべてのことをご存じであるがゆえに正しくさばかれる方であり、神はふさわしい報いを与えられる方だから。しかし、自分が主によって恥を見るような歩みをしていないか気をつけて、自らが悔い改める歩みをすべき。

どんな中であっても、主の平安をいただき、どんな中でも平安に、主をたたえる姿を証しとして、主の力を世に告げ知らせ、大能のわざを後に来るすべての者に告げ知らせる信仰者でありたい。